

の業績顕彰の目的と生誕百二十年を記念して、Piazza Ruggiero Oddi (オッジ広場) を市内に建設中である。それらの経過についても述べてみたい。

(弘前大学医学部第二外科)

金・元時代における社会と医家の地位

山本 徳子

金・元時代の医学は、その王朝名をつけて、いわゆる「金元医学」とよばれている。

この時期に、それぞれ特徴のある四大家(河間学派、易水学派)の学説が形成され、医学思想の発展があり、さらに、中国医学は金・元のころに一変したといわれている。

金・元は中国への侵入者である。金の河北侵入によって、宋王朝は滅ぼされ、宋の皇族が河南において帝位につき、南宋が建てられた。河北の支配者となった金王朝が元によって滅ぼされた後、南宋もまた滅ぼされて、中国は征服王朝の元の支配下におかれた。

このような時期にあつて、金・元の医家といわれている人達をみると、そのほとんどは中国人である。これらの人達について、『金史』方技伝の伝記をみると、科擧に合格

して進士にあげられたが、それを棄てて医を学んだ、とか、早い時期に進士の業を棄てて医を学び、その技に精通した、といったことが書かれている。進士となることの榮譽を棄ててまで、医を学ぶ、ということの背後には、どのような理由が存在したのであるうか。簡単には断定できないが、当時の社会状況の影響の大きさが考えられるのである。その一因と考えられるのが、科挙制度にまつわる問題である。金玉朝では、中国人に対する態度はゆるやかであり、その政策遂行に際し、漢人士大夫を用い、かつ、科挙制度は継続され、士大夫層に仕官の希望を与えた。これに

対して、元王朝はモンゴル至上主義に基づく種族階級国家であり、国家権力との関係から四階級に分けられていた。第一級はモンゴル(蒙古人)。文武の官の最高官を独占。

第二級は色目(西域人)

第三級は漢人(金人・契丹人および高麗人)

第四級は南人(宋人。蛮子とよばれた)

すなわち、第一・二級は治者階級であり、第三・四級は被治者階級であつて庶務・雑役に用いられた。また、科挙制度は廃止され(全廢ではないが、合格者は非常に少なく、事

実上の廃止とみられている)、これによって、従来、上級職の官吏になるのが希望であり、目的でもあつた中国の士人ことにエリート士人たちは致命傷をうけた。一般士人たちは公務員になることはできたものの下級吏員であつた。

当時のいい伝えによると、医者は中ぐらいの地位にあつたが、儒者は最低の職種である乞食の上で、賤業視されていた俳優の下だという。そうすると、儒学を学ぶよりは(たとえ学んでも、それによって身分・地位の得られる科挙制度は無い)他のことを学んだ方がよい、ということがあつたのではなからうか。

東洋史における金史・元史は、ともに、ほとんど研究はなされていない分野が多いといつても過言ではなからう。そのような未発達達の歴史基盤による、いわゆる「金元医学」も、また、再考されるべきではなからうかと考えられる。そこで、医学に関連した面についてのみ、制度と医家の地位について考察を試みる。

(横浜市立大学医学部医史学教室)